

国立国語研究所学術情報リポジトリ

国立国語研究所創立50周年記念事業 見聞録

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/2030

国立国語研究所創立50周年記念事業 見聞録

国立国語研究所は1998年12月に創立50周年を迎え、これを記念して研究発表会他、公開の行事を開催しました。記念事業のプログラムは、『日本語科学4』（139-142ページ）に掲載されていますので、ご覧ください。そのうちの、新しい試みとしての「研究室公開」（12月14・15日実施）に対する感想をお二人にお願いしました。

片桐 恭弘（ATR知能映像通信研究所）

1. はじめに

板橋本町で地下鉄を降り地上へ出ると、そこは車の溢れる大きな交差点である。排気ガスから逃れるように脇道に入ると、一転して生活を感じさせる落ち着いた雰囲気の商品街が続いている。しばらく歩いていくとやがて緑に囲まれた白い建物が現れる。

国立国語研究所は、昭和23年12月20日に発足、平成10年で創立50周年を迎えた。これを記念して、昨年12月14日、15日の二日間、大規模な研究公開の催しが開催された。幸いこれに参加する機会を得たので、一部外者から見た国研の印象を報告したい。

2. 国研の印象

国立国語研究所は、東京の郊外に位置し、静かな環境と便利なアクセスを両立した理想的な場所にある。研究所は二棟の建物を中心とし、50人あまりの研究者がゆったりとしたスペースの中で研究を進めている。研究組織は、言語体系研究部、言語行動研究部、言語変化研究部、言語教育研究部、情報資料研究部の五つの研究部と、国語辞典編集室、および日本語教育センターからなっている。そこで、言語の理論的研究から言語調査の実践的研究、言語教育研究、言語資料のデータベース化まで、明確なミッションの下に、日本語を対象とした多面的な研究が進められている。国立国語研究所は、いうまでもなく日本語研究の中核的研究機関であり、長い歴史を通じて優れた研究成果を産み、そして優れた研究者を輩出してきた。筆者の所属する「若い」研究機関には無い、研究の蓄積の持つ力が感じられる。

3. 研究公開

今回の研究公開では、研究所員による口頭の研究発表と、ポスター発表という形式による研究室の公開があった。口頭発表では、方言調査に基づいた方言研究の発表3件と、国立国語研究所における用例データベース作成の方法や現状に関する発表3件があった。口頭発表はこれまでの国研の研究発表会でも行われていたが、後者のポスター発表および研究室公開は、国研としても

初めての試みである。研究室までお邪魔し、実際に研究を進めている場で研究員の方々と直接話しをすることができ、大変良い企画と感謝している。日本語の語法・語彙・表記の分析、日本語と外国語との比較、言語行動の調査・分析、各種情報・用例・記事データベース、日本語教育教材、語彙調査、方言地図、漢字コードなどについて充実した展示と説明があった。それぞれのテーマについて、研究者はどこが面白いと思っているのか、どのような事が問題となっているのかなど、直接伺うことができたのは大きな収穫であった。このような形での公開は、研究所としてもまたそれぞれの研究員にとっても大変な労力がかかることは想像に難くない。しかし、研究活動の効果的な広報という点で、また外部からの評価やフィードバックが直接得られるという点で、研究所にとっても得るところは大きいと思われる。研究機関を取り巻く環境が急速に変化しつつある時、研究活動の上手なアピールは、研究活動自体に劣らず重要な課題となっている。今回のような新しい方法の実行は高く評価されるだろう。

二日目の晩に行われた50周年記念式典では、戦後のGHQによる日本語ローマ字化の方針が、識字率の調査結果によってひっくり返され、それが国立国語研究所設立へとつながったという大変興味深いエピソードが紹介された。研究所の歴史と理念の緊密な関係にあらためて感服した次第である。

4. 国研への期待

計算言語学の立場から言語に取り組む者として、今回の研究公開を見せていただいた率直な感想は、親近感半分、違和感半分であった。国研の研究テーマには、共感を感じずるものが少なからずある。言うまでもなく、それが親近感の元となっている。例えば、計算言語学の分野でも、言語の計算機処理に言語資料の蓄積を利用する目的で、言語コーパスの作成や収集が進められている。また、よりよい人間・機械インタフェースの実現には人間同士の対話コミュニケーションから学ぶ必要があるという認識の下に、言語行動の調査・分析も行われている。このような興味の共通性に親近感を覚える一方で、違和感も感じた。それは、おそらく応用目的の認識の違いに起因すると思われる。計算言語学は、(実現性は保証の限りでないが、)計算機による言語の理解・生成・検索など具体的な応用目的を想定して、その下に進められている。それに対して、国研の研究活動は、日本語教育研究を別にすれば、具体的な応用には中立的に進められている印象を受けた。例えば、言語用例を収集する場合でも、どのようなところから集めるのか、なぜそこから集めるのかの決定において特定の応用を想定している風ではない。

応用目的がなければダメだと言いたいわけではない。分野が異なればアプローチが異なるのは当然である。言語行動の定点観測など、定期的に調査をすること自体が大きな意味を持つ。異分野の研究に違和感を感じずることを悪いことととらえるのではない。そのような違和感は重要である。特に異分野間の連携を進めるには相互の違和感を大いに尊重すべきと思う。

計算言語学では、一昔前に理論言語学と蜜月状態の時期があった。文法理論を計算機上に実現するために、言語学者との共同が積極的に進められた。しかし、現実の言語現象がすべて簡単に言語理論にのるわけではないと分かってくると、一転して言語学者に対する反発が生まれ、その

結果、両者の交流は極めて小さくなってしまった。今では、半ば冗談めかしてだが、言語学者の首を切ったのでシステムのパフォーマンスが上がったなどとさえ言われるありさまである。親近性のみを強調し、同化しようとし過ぎて、異分野連携に失敗した不幸な例と言えるだろう。

国研の研究活動においても、異分野との積極的な連携は、今後ますます重要となる。現代社会における言語とコミュニケーションの問題は、さまざまな分野の連携を要請している。教育や医療の現場におけるコミュニケーションのありかた、インターネット時代の日本語、情報機器の介在によるコミュニケーションの変容など、どれをとっても単一の学問分野のみで手に負える問題ではない。言語コーパスの構築においても、仕様の統一や資源の有効利用のためばかりでなく、著作権の扱いなど広範な取り組みを必要とする問題がある。国研が、異分野相互の連携を積極的に進め、国語のための基礎的研究を通じて、言語コミュニケーションに関する研究の推進に今後とも中心的な役割を果たしてくれることを期待している。

近藤 泰弘（青山学院大学文学部）

1998年12月15日に行われた研究室公開の行事は、おそらく研究所始まって以来の画期的な試みだったと思いますが、私たち参観者にとってもすべてが新鮮で驚きに満ちた体験でした。今までも会議等で研究所にうかがったことは何度もありましたが、今回のように多くの研究室やその資料を一度に拝見させていただいたことはもちろんありませんでしたので、まさに見るもの聞くものが面白いという状態でした。その中で、特に私の個人的な関心からとりわけ興味深く拝見したことについて以下、簡単に申し述べます。なお、記述は研究室を回った順序です。

最初に日本語教育研修室で日本語教育関係の収集された教材とパソコンを利用した CAI の教材を見ました。ここではきわめて多くの各種パソコンがネットワークで接続されて利用されており、日本語教育の世界におけるネットワーク化の進行を知ることができました。また興味深い各種の教材を見ることもできました。

この部屋は縦横にイーサネットが引かれており、そのネットワークのハードウェアシステムの一面を見ることができた他、また、研究所内専用の WWW サーバー（研究情報共有用）の一部にアクセスすることもできて、ソフトウェアの面からも見学することができました。現状ではまだ、研究情報共有サーバーは未完成のようでしたが、今後、このような試みがさらに進展し、内部で資料が共有され、さらには外部にも公開されるというような方向性が期待されるようです。これは日本語教育の部門だけのことでなく、研究所の所有する膨大な言語データや言語関係の諸データベースの全体が今後さらに高度に利用されるための基礎的な研究が望まれるところです。

次に国語辞典編集室ではこれまで集積された大量の言語データのカードや新しく作成されている「雑誌太陽」のデータベースなどを見学し、新旧のシステムを見て感慨を新たにしました。そ

れぞれの方法に一長一短はあるにせよ、やはり現在のテクノロジーをうまく使いこなすことは研究能率の向上には欠かせないものだと思います。漢字の包摂基準の問題やその他計算機上のデータにする場合には従来になかったいろいろな問題が発生することがあるわけですが、データの扱い方についての新しい規格（XMLなど）を利用することでそれらの解決を計ることが可能になっているはずで

次に言語変化第二研究室で各種対訳辞書の珍しい版本を拝見しました。私は以前勤務していた大学の研究室でこの種のものの購入をしていたこともあって、とりわけ興味深く見ることが出来ました。近年はこの種の辞書もほとんど市場に出回ることがなくなり、これからのコレクションはなかなか難しいものがあります。研究所で情報の整理にあたっていただけることはありがたいことです。

次に情報資料第一研究室では、日本語関係の「新聞記事切り抜き」の膨大なデータベースを見ることができました。このデータベースについては、その切り抜きという形態から十分な活用がなされていないように感じました。正直、これだけのデータベースが存在していることについては、私自身もこれまできわめて不勉強であったと感じます。データの整理については光ディスクへの保存など新しいメディアによる方法が考えられているようですが、ぜひ、より簡単でかつ応用度の高い利用法が開拓されることを期待しております。

次に言語行動第二研究室では、音声資料の収録方法とそのデータ化についてのデモンストレーションを見ることができました。音声資料のデータそのものの収集はきわめて電氣的あるいは物理的な方法で収集できるのに対し、それをテキストとして電子化するためには、あくまで人間の聞き取りと文字化という、いわば原始的な方法が最善であるということを知ることができたのは収穫でした。と同時に、テキストを高速なワークステーションできわめて能率的に処理をすることができることも印象的でした。計算機や機械はやはり適材適所に使いこなしてゆくことが重要であることを、改めて感じた次第です。

なお、通常の実験室公開の他に、研究所の古いポスターや出版物、手回し式のタイガー計算機、オープンリールの録音機などの歴史的資料の展示があり、きわめて面白く拝見できました。タイガー計算機の実物をしっかりと見ることができたのは初めての経験であり、ありがたいことでした。ほんの数十年前までは電卓もパソコンもなく、複雑な計算はこれによって行っていたということは知識としては知っていたのですが、これはとても感慨深いものでした。ツールと研究内容との関わりという問題について考えさせられたことです。

以上、研究所の多くの研究室を拝見したほんの一部の感想ですが、とにかく有益な一日でした。その後帰宅してから、いただいた研究所要覧を見ると、予算の点、また、各種計算機設備の点など、現状ではきわめて不足している点が多くあることを知りました。

今後、研究所の言語研究が国際化、情報化の流れの中で従来よりも広く発展してゆくためには、研究所内部の計算機ネットワークの充実とインターネット接続の充実が重要であることは言うまでもないことですが、そのためには、予算の点で現状ではかなり困難な点が多いことだと思います。そのことを改めて述べて、感想のまとめとしたいと存じます。